

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 13 日現在

機関番号：32604

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22402049

研究課題名(和文) 日系国際児の二言語形成過程の質的研究

研究課題名(英文) Qualitative research of the development of biliteracy in international children with Japanese mothers

研究代表者

柴山 真琴 (SHIBAYAMA, Makoto)

大妻女子大学・家政学部・教授

研究者番号：40350566

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 6,600,000円、(間接経費) 1,980,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ドイツ居住の独日国際児の二言語形成過程を「親子の協働的・解釈的過程」と捉え、3つの調査(行動観察、フィールドワーク、二言語検査)を実施した結果、以下の成果を得た。1)二言語での読み聞かせや読書活動と現地校・補習校の宿題遂行が対象児の二言語での読み書き力を支える中核的な家庭内実践であり、親による支援の組み直しと子どもの変容が共起していた。2)対象児のドイツ語(学校言語)の力は当該年齢児の中でも高かったが、日本語(継承語)力の伸びはより緩やかであった。物語課題作文の分析から、構成力は二言語で共通しているが、表現の豊かさと使用の適切さにおいて二言語間に差があることも明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This research, undertaken from the perspective that the process by which children learn two languages involves parent-child collaboration and interpretation, examined the development of biliteracy using case studies of simultaneously bilingual children from German-Japanese families residing in Germany. Qualitative analyses of data obtained from diaries, fieldwork, and language tests in German and Japanese revealed the following: 1) Reading books to children or children reading by themselves and performing homework assigned by local and supplementary schools were central to fostering biliteracy. 2) Children had as high a level of competence in German, the language used at school, as did others in their age group, whereas their development of Japanese as a heritage language was slower. Analysis of narrative compositions reflected similarity of their content and story organization in both languages, whereas the richness and appropriateness of their expressions differed between the languages.

研究分野：社会科学A

科研費の分科・細目：教育心理学

キーワード：教育系心理学 二言語形成 パイリテラシー 日系国際児 質的研究 日誌法 言語検査 フィールドワーク

1. 研究開始当初の背景

子どもの二言語習得過程に関する研究は、欧米において欧米語(第一言語(L1)あるいは第二言語(L2)が英語)を中心になされてきた。日本語をL1/L2とする実証的な二言語習得研究は、日本語(L1)と英語(L2)を同時に習得する海外子女を対象に着手され、本研究の開始当時は、日系国際児(親の一人が日本人である国際結婚家族の子ども)へと研究対象が拡大しつつあった。ただし「英語 - 日本語」の組み合わせが中心で、ドイツ語圏の日系国際児の二言語習得過程に関する研究は、日本でもドイツでもほとんど研究の蓄積がなかった。

また、従来の二言語習得研究の限界として、子どもが日常活動の中で二言語を習得していく過程が具体的に検討されていない点を指摘することができた。従来の日系国際児研究では、質問紙調査・言語力測定・面接調査を研究手法として採用するものが多く、家族の実践過程を具体的に開示し得るようなデータはほとんど収集されていなかった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ドイツ語 - 日本語同時バイリンガル児の二言語での読み書き力(バイリテラシー)の形成過程を、子どもを現地校と日本語補習授業校(以下、補習校)に通わせる国際家族の事例に基づいて解明することである。特にフィールドとした補習校で最も多い独日国際家族(ドイツ語母語話者の父親と日本語母語話者の母親の組み合わせ)を対象として、次の3つの課題を設定した。

[課題 1] 幼児期から児童期までを射程に入れた長期的なスパンでのバイリテラシー形成過程の解明。

[課題 2] 海外居住という日本語の刺激が限定された日本語環境下で、日本語を継承語として学ぶ子どもが形成する日本語力の特徴の解明。

[課題 3] ドイツ特有の条件がバイリンガル

児童の二言語形成過程に及ぼす影響を浮き彫りにすること。

3. 研究の方法

(1) 研究方法論

本研究で採用した研究方法論には、次の2つの特徴がある。

第一に、独日国際児の二言語形成過程を「共同行為論」の立場から解明しようとしたことである。従来、子どもの二言語習得は、個人的行為ないしは個人の能力の問題と見なされることが多かった。しかしながら、子どもは親がアレンジした言語活動への参加を通して、二言語の使い手になっていくと考えられた。独日国際児のバイリテラシー形成過程を「より有能な他者(親・年長のきょうだい・仲間など)との協働的・解釈的過程」として検討した点に、本研究の理論的特徴がある。

第二に、日常実践研究と二言語習得研究を交差させた研究方法を採用したことである。質的研究法(日誌法[親による子どもの行動観察]、フィールドワーク)と二言語検査を組み合わせることにより、二言語形成に関わる家族の日常的な営みを重層的かつ系統的に記録した点に、本研究の方法的特徴がある。

(2) 研究対象

本研究では、先行研究の検討から示唆されたバイリテラシー形成上の重要な年齢(幼稚園入園を経験する3歳頃、小学校入学を経験する6歳頃、小学校中学年に進級する8,9歳頃)に相当する子どもがいる独日国際家族のうち、子どものバイリテラシー形成に有利な条件を持つ家族(母親のドイツ語力が高く、母子間で日本語を使い、親子で定期的読み書き活動に参加している家族)を研究対象とした。

4. 研究成果

本研究で収集したデータの一部は分析途

中であるが、現時点までに得られた本研究の主要な成果は、以下のように整理できる。

(1)[課題 1]に関する成果

二言語での宿題遂行と読み聞かせ・読書活動(特に社会の少数言語かつ相対的に弱い言語である日本語を使った活動への支援)が、対象児のバイリテラシー形成を支える中核的な家庭内実践であった。具体的な知見は、以下の通りである。

1)二言語で正式な読み書き教育を受ける前段階にある幼児の場合、ルーティン化された活動での重要な他者による誘導と対象児の主体的な参加を通して、萌芽的読み書き行動が生起している点は二言語で共通であった。他方で、社会の言語であるドイツ語では、年長の子ども(姉や幼稚園の年長児)の模倣から書く行動が始まり、継承語である日本語では、母子間での絵本に媒介された活動の中で読み行動が始まるという違いもあった(図 1 参照)。

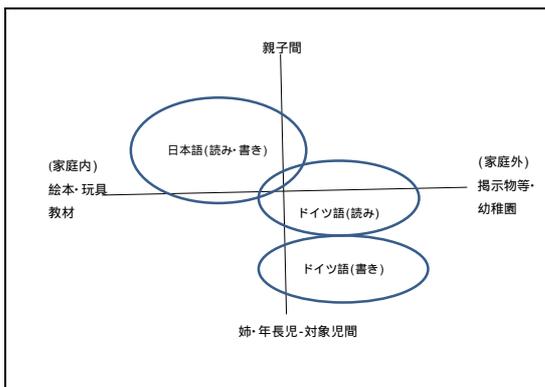


図 1 他者との協働と媒介物から見た対象幼児の二言語での萌芽的読み書き行動 (柴山他(印刷中)より引用)

2)現地校・補習校で本格的な読み書き教育を受け始める小学生の場合、両校の宿題遂行過程では、低学年児・中学年児共にドイツ語力の高い日本人母親が両方の宿題の主要な支援者で、母親達は子どもの関心・二言語力・心理状態を踏まえて、宿題への定期的・継続的な参加を誘導していた。他方で、学年による違いも見られた。低学年児の支援過程では、

継承語学習の意味をめぐる母子間の葛藤調整が生じていたが、中学年児では(特に基礎学校の最終学年である小 4 になると)、進学に直結するテストの成績が親子の最大の関心事になり、ドイツ語モノリンガル児並みの高いドイツ語力の形成に向けた支援調整がなされるようになった。

3)小学生段階の二言語での読書活動は、親が読書の楽しさの体験を仕組む序列的な伝達関係に後押しされて開始され、本を含む多様なメディアを通じた楽しさの体験を子ども自身が拡張していく自己社会化へと進んでいった。ただし、ドイツ語の読書は家庭外の関係にも拡張するのに対して、日本語の読書では、親の工夫や努力に規定されがちであるという違いが見られた。

いずれの活動においても、言語環境的・学校制度的要因に規定されながらも、子どものバイリテラシー形成に向けた実践の中で、利用可能な資源を活用しつつ、親による支援の組み直しと子どもの変容が共起している様相を具体的に開示することができた。

(2)[課題 2]に関する成果

分析対象とした 5 人の独日国際児は、ドイツ語の受容面では当該学年の上位に位置しており、現地校では高成績群に属していた。一方、日本語の受容面も緩やかに伸びつつあったが、「語彙」「漢字」(国内居住の日本語モノリンガル児の当該学年より 1-2 年下)に比べると「文法」「語用能力」が比較的高いという特徴が見られた。

また、対象児が 2 年間にわたって二言語で書いた「物語課題」作文の横断的分析から、以下のような知見が得られた。

1)物語の構成力は二言語で共通しているが、表現の豊かさと使用の適切さにおいて二言語間に差があった。ドイツ語では形容詞や関係代名詞による名詞の修飾、様子を表す動詞・副詞、慣用句、複文や多様な接続詞など

の手段を学年相当レベルで持っているのに対して、日本語ではこれに相当する語彙や表現の手段が相対的に少ないために表現が限定され、不適切な使用が生じていた。特に詳しい描写や複雑な構文の使用が試された箇所で、不自然で不適切な日本語表現が見られたが、ドイツ語からの転用と考えられるものが多かった。他方で、年長児の日本語作文には、ドイツ語作文で使用されていない日本語だけに見られる表現も出現していた。

2)日本語の詳述の手段も2年間で増加していたが、その増え方はドイツ語より緩やかなために、結果として二言語間の差が拡大していると考えられた。

(3)[課題3]に関する成果

ドイツ特有の条件のうち、小4の成績で中等学校への進学振り分けが決まるというドイツの分岐型学校制度は、対象児の二言語形成過程に以下のような影響を及ぼしていた。

1)大学につながる学校種であるギムナジウムに進学するためには、小4の9月から翌年4月までの間に実施される進学テスト(ドイツ語12回・算数6回・生活科6回の計24回)の最終成績が進学基準点を満たす必要があった。ギムナジウムへの移行を経験した対象児の場合、小4への進級を境に親子の関心が現地校の成績に向くようになり、放課後の家庭学習の重点が現地校の宿題とテスト準備にシフトしていった。

2)現地校で小4になると補習校の宿題をするだけで手一杯になった。継承語児にとって習得しにくい漢字・熟語の練習がほとんどできなくなったことも相俟って、学年配当の漢字・熟語の習得に難しさを感じるようになった。補習校通学を続けつつも、教科としての「国語」の学習内容が高度化し「教科学習言語」の習得が本格化する小学校中学年時に、日本語学習に充てる学習時間が減少するという事態が生じていた。

独日国際児を対象とすることで、これまで未解明であった「ドイツ語 - 日本語」の組み合わせ例においても、漢字・熟語を含む語彙の習得に継承語習得上の難しさがあることを具体的に指摘できただけでなく、現地の学校制度(早期選抜の圧力)が継承語を教科学習言語レベルで習得することをより一層困難にしていることも描出することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

柴山真琴・ビアルケ(當山)千咲・高橋登・池上摩希子(印刷中)「同時バイリンガル幼児の萌芽的読み書き行動の形成過程」『母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究』第10号。(査読有)

柴山真琴・ビアルケ(當山)千咲・池上摩希子・高橋登(2014)「小学校中学年の国際児は現地校・補習校の宿題をどのように遂行しているのか：独日国際家族における二言語での読み書き力の協働的形成」『質的心理学研究』第13号, pp.155-175。(査読有)

柴山真琴(2013)「『文化と発達』研究の道具箱を探して」『質的心理学フォーラム』第5号, p.79-80。(査読有)

ビアルケ(當山)千咲・柴山真琴・池上摩希子・高橋登(2013)「バイリンガル児はどのように二言語で読書をするようになるのか：読書文化の世代間における伝達過程」『質的心理学研究』第12号, pp.24-43。(査読有)

柴山真琴・ビアルケ(當山)千咲・高橋登・池上摩希子(2012)「独日国際児の現地校・補習校の宿題遂行過程：親子の共同行為という視点から」『異文化間教育』第36号, pp.105-122。(査読有)

柴山真琴(2010)「文化と発達」, 日本児童研究所(編)『児童心理学の進歩』Vol.49, pp.1-26。(査読有)

〔学会発表等〕(計 15 件)

柴山真琴・池上摩希子・ピアルケ(當山)千咲・高橋登 (2014) ケース/パネル発表「独日国際児のバイリテラシーの形成過程(3): 課題作文の横断的分析を中心に」異文化間教育学会第 35 回大会(『異文化間教育学会第 35 回大会発表抄録』pp.212-213) 2014 年 6 月 8 日 (同志社女子大学)

池上摩希子 (2014) 「二言語課題作文の分析結果から見える日本語で『書く』力: 独日国際児のバイリテラシー形成過程の研究より」フォーラム「多様な言語文化背景をもつ子どもたちのリテラシー発達: 3 つの調査報告から」2014 年 3 月 30 日 (早稲田大学)

柴山真琴 (2013) 「幼児期からのことば育て」ミュンヘン日本語補習授業校講演会 2013 年 10 月 19 日 (ミュンヘン日本語補習授業校)

ピアルケ(當山)千咲 (2013) 「二言語での読み聞かせと読書」ミュンヘン日本語補習授業校講演会 2013 年 10 月 19 日 (ミュンヘン日本語補習授業校)

高橋登 (2013) 「日本語入力が少ない環境における漢字・語彙の教育と授業」ミュンヘン日本語補習授業校研修会 2013 年 10 月 19 日 (ミュンヘン日本語補習授業校)

池上摩希子 (2013) 「補習校の授業活動作り: 漢字・語彙学習との関連を視野に入れて」ミュンヘン日本語補習授業校研修会 2013 年 10 月 19 日 (ミュンヘン日本語補習授業校)

柴山真琴・ピアルケ(當山)千咲・池上摩希子・高橋登 (2013) ケース/パネル発表「独日国際児のバイリテラシーの形成過程(2): 課題作文の縦断的分析を中心に」異文化間教育学会第 34 回大会(『異文化間教育学会第 34 回大会発表抄録』pp.162-163) 2013 年 6 月 9 日 (日本大

学)

柴山真琴 (2013) 「多言語環境で育つ子どものことば育て」タイにおける母語・継承語としての日本語教育研究会(JMHERAT) 2013 年 3 月 10 日 (バンコク・インターチェンジビル)

柴山真琴・ピアルケ(當山)千咲・池上摩希子・高橋登 (2012) ケース/パネル発表「独日国際児のバイリテラシーの形成過程(1): 談話に現れる書きことばの特徴の分析を中心に」異文化間教育学会第 33 回大会(『異文化間教育学会第 33 回大会発表抄録』pp.136-137) 2012 年 6 月 10 日 (立命館アジア太平洋大学)

柴山真琴 (2012) 「共同行為としての二言語習得: 独日国際児の研究から」日本発達心理学会「文化比較・行動比較分科会」2012 年 4 月 21 日 (白百合女子大学)

柴山真琴・ピアルケ(當山)千咲・池上摩希子・高橋登 (2011) 「バイリンガル児の現地校・補習校の宿題遂行過程: 初等学校から中等学校への移行を経験した独日国際児の事例から」日本質的心理学会第 8 回大会(『日本質的心理学会第 8 回大会プログラム抄録集』p.97) 2011 年 11 月 26 日 (安田女子大学)

ピアルケ(當山)千咲・柴山真琴・高橋登・池上摩希子 (2011) 「バイリンガル児の二言語における読書活動の社会化過程: 教育的関係における文化の伝達関係論を手がかりに」日本質的心理学会第 8 回大会(『日本質的心理学会第 8 回大会プログラム抄録集』p.98) 2011 年 11 月 26 日 (安田女子大学)

柴山真琴・ピアルケ(當山)千咲 (2011) 「学童期に必要なことばの力」平成 23 年度ドイツ地区日本語補習授業校現地採用講師研修会 2011 年 10 月 29 日 (ミュンヘン日本人国際学校)

ピアルケ(當山)千咲・柴山真琴・池上摩
希子・高橋登 (2011)「国際児の二言語に
媒介された社会文化的活動への参加過程
(2)：現地校・補習校の宿題遂行過程の分
析」異文化間教育学会第 32 回大会(『異
文化間教育学会第 32 回大会発表抄録』
pp.178-179) 2011 年 6 月 12 日 (お茶の
水女子大学)

柴山真琴・ピアルケ(當山)千咲 (2010)
「国際児の二言語に媒介された社会文化
的活動への参加過程(1)：第 期調査の中
間報告」異文化間教育学会第 31 回大会
(『異文化間教育学会第 31 回大会発表抄
録』 pp.120-121) 2010 年 6 月 13 日
(奈良教育大学)

〔図書〕(計 5 件)

柴山真琴 (2013)「エスノグラフィの考
え方」日本発達心理学会(編)『発達心理
学と隣接領域の理論・方法論』(『発達科学
ハンドブック』第 1 巻) 新曜社,
pp.307-315.

柴山真琴 (2013)「バイリンガル」日本
発達心理学会(編)『発達心理学事典』
丸善出版, pp.16-17.

柴山真琴 (2013)「児童期の二言語力の
形成」松尾知明(編)『多文化教育をデ
ザインする：移民時代のモデル構築』
勁草書房, pp.128-148.

柴山真琴 (2013)「バイリンガル教育」
小田豊・山崎晃(監修)『幼児学用語集』
北大路書房, p.230.

柴山真琴 (2013)「フィールドへの参入
と参与観察」やまだようこ他(編)『質
的心理学ハンドブック』新曜社,
pp.182-196.

〔その他〕

大妻女子大学ホームページ / 研究助成情報
[http://www.gakuin.otsuma.ac.jp/jyosei/
modules/saitaku/](http://www.gakuin.otsuma.ac.jp/jyosei/modules/saitaku/)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

柴山 真琴 (SHIBAYAMA, Makoto)

大妻女子大学・家政学部・教授

研究者番号：4 0 3 5 0 5 6 6

(2)研究分担者

高橋 登 (TAKAHASHI, Noboru)

大阪教育大学・教育学部・教授

研究者番号：0 0 1 8 8 0 3 8

池上 摩希子 (IKEGAMI, Makiko)

早稲田大学・大学院日本語教育研究科・
教授

研究者番号：8 0 4 0 9 7 2 1

(3)連携研究者

(なし)

(4)海外共同研究者(2011 年度より研究協力者)

ピアルケ(當山) 千咲(Toyama-Bialke,
Chisaki)

ミュンヘン日本語補習授業校・講師(2010
年度)(2011 年度より、大妻女子大学ほか・
非常勤講師)